

〈研究ノート〉名古屋城関連庭園遺跡の礫敷の検討方法

高橋 圭也・永井 邦仁（愛知県埋蔵文化財センター）

キーワード

礫敷 州浜 園池

1. 矶敷遺構評価の目的（高橋）

名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査は名勝指定以前を含めると15回実施しており、多数の庭園遺構を確認している。周辺ではこの他に名古屋城三の丸遺跡（御屋形庭園）⁽¹⁾や名城公園遺跡（下御深井御庭）⁽²⁾の発掘調査で庭園遺構を確認している。城下では堅三藏通遺跡、白川公園遺跡⁽³⁾、尾張元興寺遺跡⁽⁴⁾で近世の庭園と考えられる遺構を確認している。江戸の尾張藩関連遺跡でも上屋敷や下屋敷で発掘調査されている。このように尾張藩に関連する庭園遺跡は発掘成果の蓄積が進んでいる。一方で各庭園遺跡の個別遺構の比較検討は成果の蓄積に対しあまり活発に行われていない。趣味世界を再現するという庭園の特性上、庭園ごとに独自性が強く共通する遺構に乏しい等、個別遺構の比較検討が活発化しにくい環境となっている。

本論文では複数の庭園から共通する遺構を抽出して比較検討を試みる。具体的には礫敷に着目し、礫種や礫径などの比較と産地の特定を行い、各庭園の差異を明らかにする。

対象となる礫敷は既に報告されている名勝名古屋城二之丸庭園（以下、「二之丸庭園」とする）1次～8次発掘調査、名古屋城三の丸遺跡第7次調査、一部成果の概要は報告されているが現在再整理中の二之丸庭園1976・1977年度発掘調査及び9次調査で出土した礫敷、現在整理中の名城公園遺跡発掘調査⁽⁵⁾で出土した礫である。他に堅三藏通遺跡で池状遺構の護岸緩斜面に礫が点在していたが、資料が不足しているため抽出を見送った。

2. 分析の対象となる遺跡と遺構について

2-1. 二之丸庭園（図1）

現在みられる姿は徳川斉朝が19世紀に整備した庭園をもとに19世紀末から20世紀にかけて陸軍が改修を行った庭園である。

礫敷は北池の東端（A, B）、西側（C, D）に池底から1段高くなっているテラス状空間に存在している。Aはタタキ面の直上に位置し、約4m×約2mの規模でタタキ面を覆い隠すように施工されている。Bは橋の取付き部分と考えられる空間に位置し、礫敷は約1m四方の空間全体に施工されている。池の東側は遅くとも1882年（明治15）には埋没するため、礫敷はそれ以前の構築である。Cは約3m四方、Dは約1m四方の規模で池の西側に位置している。西側は構築以来地表に露出しており、層位から年代を求めることができない。CとDは19世紀以降に構築されたとしか言いようがなく、CとDに時期差があるか否かも不明である。

もう一箇所は二之丸庭園の中央に位置する仮称“新池”の池底から出土した。新池は景石数十石に囲まれた空間で、平坦な底部表面に礫が敷き詰められていた。池は近世末～近代初に形成されたと考えられる瓦溜上に位置し、埋土には近代の遺物が含まれている。（高橋）⁽⁹⁾

2-2. 御屋形庭園（図2）

御屋形庭園は三之丸の東側に位置する藩主の親族が居住した御屋形に付属する庭園である。

礫敷はSX02（池状遺構）で確認した。SX02は18世紀に構築され19世紀前半に廃絶した。池は中央がくびれた平面形で、東西に張り出しを持つ。東張り出しで礫敷を確認した。また池底に薄く粘土が貼られ、表面に玉石が敷き並べられていた。礫は全体に均質に分布しているわけではなく、いくつかの集中が存在する。本論文では北西部床面、北東部床面、南西部床面、

南東部床面、集石 A、C、D を池底とし、東張り出し部盛土中と集石 B を東張り出しとした。
(高橋)

2-3. 下御深井御庭（図 3）

下御深井御庭は尾張初代藩主義直によって寛永 11 年（1634）に初めて整備された庭園であるが、文政年間（1818～1830）に第 10 代藩主齊朝が大きく改変したとされる。しかし旧日本陸軍第三師団の練兵場などの造成によって、現地表にその面影はほとんどない。しかし 2021・2022 年度に愛知県埋蔵文化財センターが行なった名城公園遺跡の発掘調査において、江戸時代の陶磁器類や瓦類さらに石灯籠の一部（宝珠）が出土する遺構群が確認された。陶磁器類には、庭園の一角で製作されたという御庭焼の失敗品と思われるものや、棚板などの窯道具も多数含まれている。これら発掘調査成果の一端と『下御深井御庭図面』（名古屋市蓬左文庫所蔵）などの文献史料を対照させることによって、名城公園遺跡が下御深井御庭の一部である可能性がきわめて高いと考えられる。

21Aa 区 00202SX（以下 202SX）は名城公園遺跡の発掘調査区南端近くに位置する。まず、練兵場期の整地層を掘り下げる中で多量の円礫が出土したため、「検 1」としてランダムに 222 点を採取した。その後、同地点では江戸時代後期の井戸や廃棄土坑などの遺構群が検出されたが、その中で最大規模（長径約 8m × 短径約 4m）となるのが 202SX である。この遺構は平らな底面と一部に角礫が貼り付けられた状況から池状遺構と考えられ、埋土からは瓦類や窯道具などが多量に出土した。これらは下御深井御庭廃絶時の埋め立てに伴うものと推測され、埋土中には円礫も散在していた。当該遺構からは 176 点の円礫を同様に採取した。

以上のように、名城公園遺跡では 2 つの異なる堆積状況にある円礫のサンプル採取を行っ

た。（永井）

3. 分析の手法と結果（図 5～7）（高橋）⁽¹⁰⁾

発掘調査目的が各遺跡で異なるため、発掘調査の手法や整理方法、計測方法に若干の差異がある。二之丸庭園では遺構を検出した段階で大体礫 100 点が収まる大きさの正方形グリッドを設け、グリッド内から 100 点を計測した。礫が 100 点に満たない場合は全てを計測した。下御深井御庭では礫を遺物として採取し、整理の過程で計測した。御屋形庭園では礫種が報告されているため引用した。加えて池底については愛知県埋蔵文化財調査センターが保管している礫をランダムで 40 点抽出し計測を行った。

計測内容は礫種、礫径（長径）、円磨度である。礫種は花崗岩類、チャート、砂岩、頁岩、ホルンフェルス、溶結凝灰岩、その他に区分した。礫径は堆積学に倣って礫径が 2～4mm を細礫、4～64mm を中礫、64～256mm を大礫とした。円磨度は印象図⁽¹¹⁾を用いて測定し、円礫、亜円礫、亜角礫、角礫に分類した。円磨度から河川のどの範囲で採取したか推測することができる。円礫は下流域～河口、円礫～亜円礫は中～下流域、亜円礫～亜角礫は中流域、角礫は上流域で採取することができる。ただし現代に堤防やダムが建設された影響で、礫採取時の流域区分と一致するとは限らない。

分析結果は図 5～7 の通り。遺構ごとに計測点数が異なっているため、割合から分析することが望ましい。

今回確認できた砂岩は美濃帯の砂岩、溶結凝灰岩は濃飛流紋岩類となっている。御屋形庭園と下御深井御庭の花崗岩類を細分化すると 9 割以上がアプライトで僅かに花崗閃緑岩が確認できた。二之丸庭園は全て花崗閃緑岩であった。

4. 検討の結果と総括（高橋）

3つの庭園遺跡にて8箇所の礫敷から礫を分析することができた。

礫種の割合を見ると下御深井御庭 202SX と御屋形庭園東張り出し以外はチャートが主体となっており、全体の7割以上を占めている。下御深井御庭 202SX と御屋形庭園東張り出しも次点でチャートが多い。表には表れないが、二之丸庭園と下御深井御庭のチャートは赤褐色、黄褐色、灰青色など鮮やかな色の礫が目立った。全体でみると統一感のない色構成であった。一方で下御深井御庭 202SX は白色のアプライト、御屋形庭園東張り出しは白色の珪質頁岩が主体であり、色彩を意識していると考えられる。チャートは色を選んでいないことに加え、円磨度から名古屋城から3キロ離れた庄内川・矢田川水系の中・下流域で採取したと考えられる入手し易さから、色彩よりも経済性を選択した結果と考えられる。

礫径をみると二之丸庭園では新池池底に敷かれた礫が小さく、北池テラス上に敷かれた礫が大きいという結果になった。異なる池かつ構築時期が不明という点を考慮しなければならないが、池底と池の縁で礫径を使い分けている可能性が考えられる。御屋形庭園では逆に東張り出しの礫が小さく、池底の礫が大きくなっている。⁽¹²⁾二之丸庭園とは礫径の大小が逆転しているが、池底と池の縁で礫径に応じて使い分けている可能性を補強することができる。

今回の分析では礫にはどのような分析は有効であるのか、礫敷遺構を検出した際はサンプルとして礫を取り上げるべきか、遺構外であってもまとまった数の礫が出土した場合、どう取り扱うべきであるか、という疑問をもとに検証を行った。限られたサンプルのため礫から遺構の性格や特徴を考察するには不十分であったが、礫敷遺構の位置によって礫径が変化する可能性

を指摘することができた。

今後の課題として、二之丸庭園のような施工時期が明確でない礫敷に対して、下御深井御庭や屋形庭園のような廃絶時期が明らかな礫敷のデータから礫敷の時期を推測することができるかという課題がある。今後は現在まで埋没することなく存続し続けている庭園遺構に対して、年代比定方法の一つとなるようサンプルを充実させなければならない。

註

- (1) 愛知県埋蔵文化財調査センター『名古屋城三の丸遺跡VII』2005
- (2) 愛知県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われ、庭園関連遺構を確認した。現在整理中。
- (3) 豊田通商株式会社『豎三藏通遺跡』2006
- (4) 名古屋市見晴台考古資料館『白川公園遺跡（第5次）』2010
- (5) 名古屋市教育委員会『尾張元興寺跡第15次発掘調査報告書』2015
- (6) 本論文における“礫敷”とは複数の直径20cm以下の礫が平坦面もしくは緩斜面に密に設置されている状態の遺構とする。小野健吉『岩波日本庭園辞典』2004における「洲浜」を含む。
- (7) 成果の一部は名古屋市教育委員『名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書』1976にて報告されている。
- (8) 愛知県埋蔵文化財センター『名古屋市北区名城公園遺跡 地元説明会資料』2022、永井邦仁ほか「名城公園遺跡」『年報』2023令和4年度 愛知県埋蔵文化財センター
- (9) 成果整理中のため、評価が変更する可能性がある。
- (10) 地質学的な所見に関しては田口一男氏にご教示いただいた。礫の計測は二之丸庭園は田口と高橋が、御屋形庭園は高橋と村上慶介（名古屋城調査研究センター）が、下御深井御庭は堀木真美子（愛知県埋蔵文化財センター）が行った。
- (11) 地学団体研究会最新地学事典編集委員会編『最新地学事典』2024
- (12) 『名古屋城三の丸遺跡VII』にて重量の記載がある。東張り出しはほとんどが20g以下だが、池底は20g以上の礫の方が多い

《Title》

An examination method of excavated gravel ruins at garden remains related to Nagoya Castle

《Keyword》

gravel ruins, pebble beach, garden pond

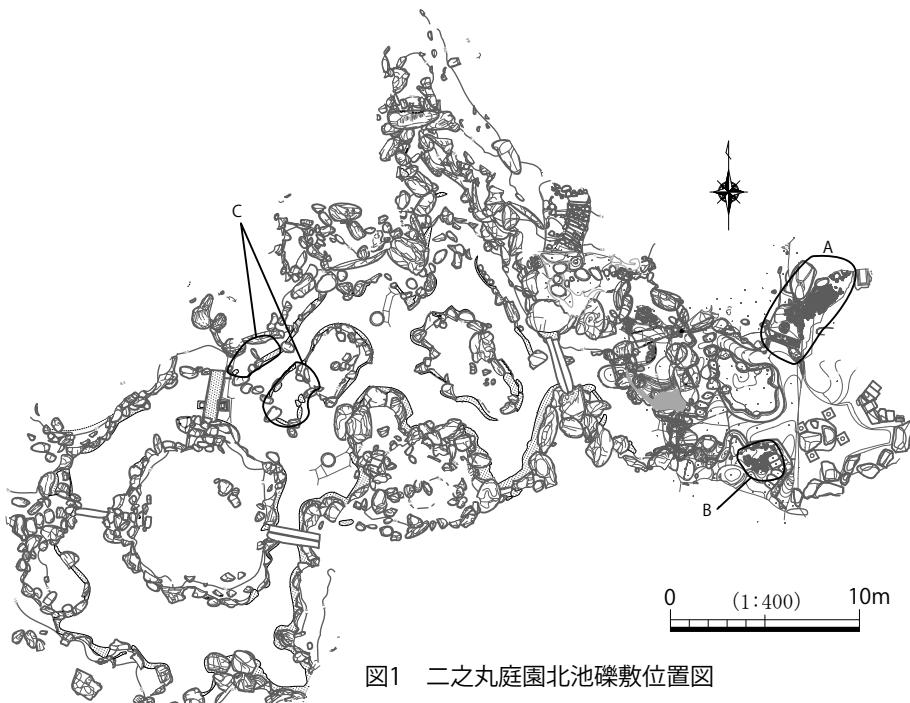


図1 二之丸庭園北池礫敷位置図

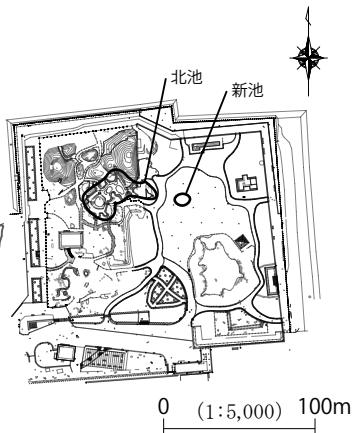
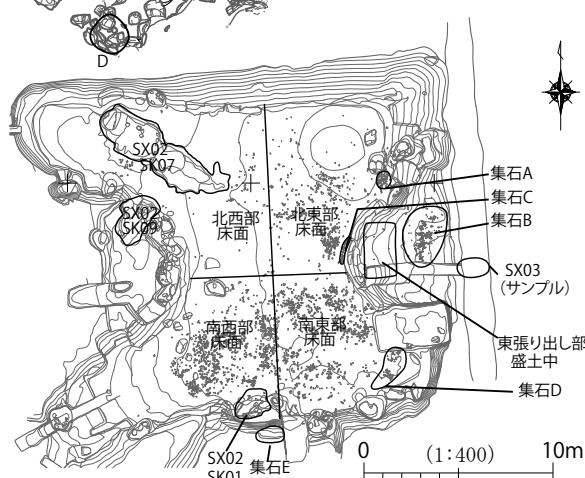
図2 名勝名古屋城二之丸庭園
平面図 北池及び新池位置図3 御屋形庭園SX02平面図『名古屋城三の丸遺跡』7より
一部改変

図4 名城公園遺跡(下御深井御庭)平面図及び礫採取位置図

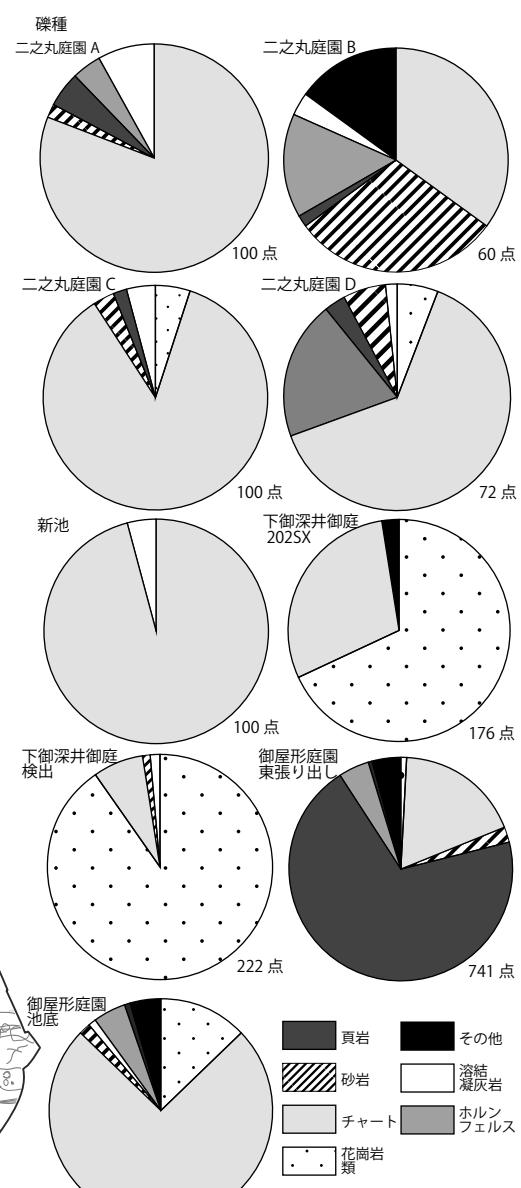


図5 磯種円グラフ

円磨度

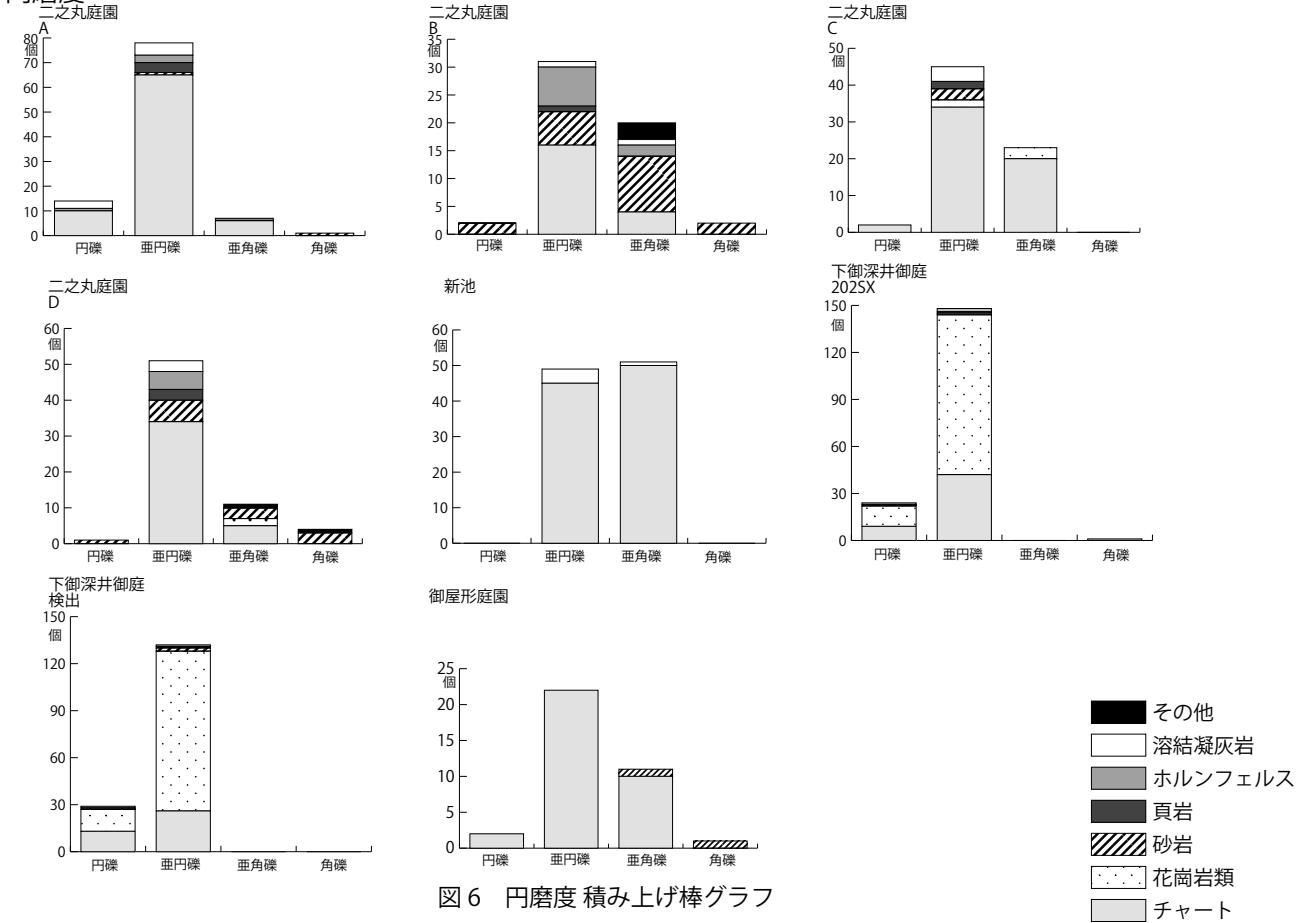


図 6 円磨度 積み上げ棒グラフ

礫径

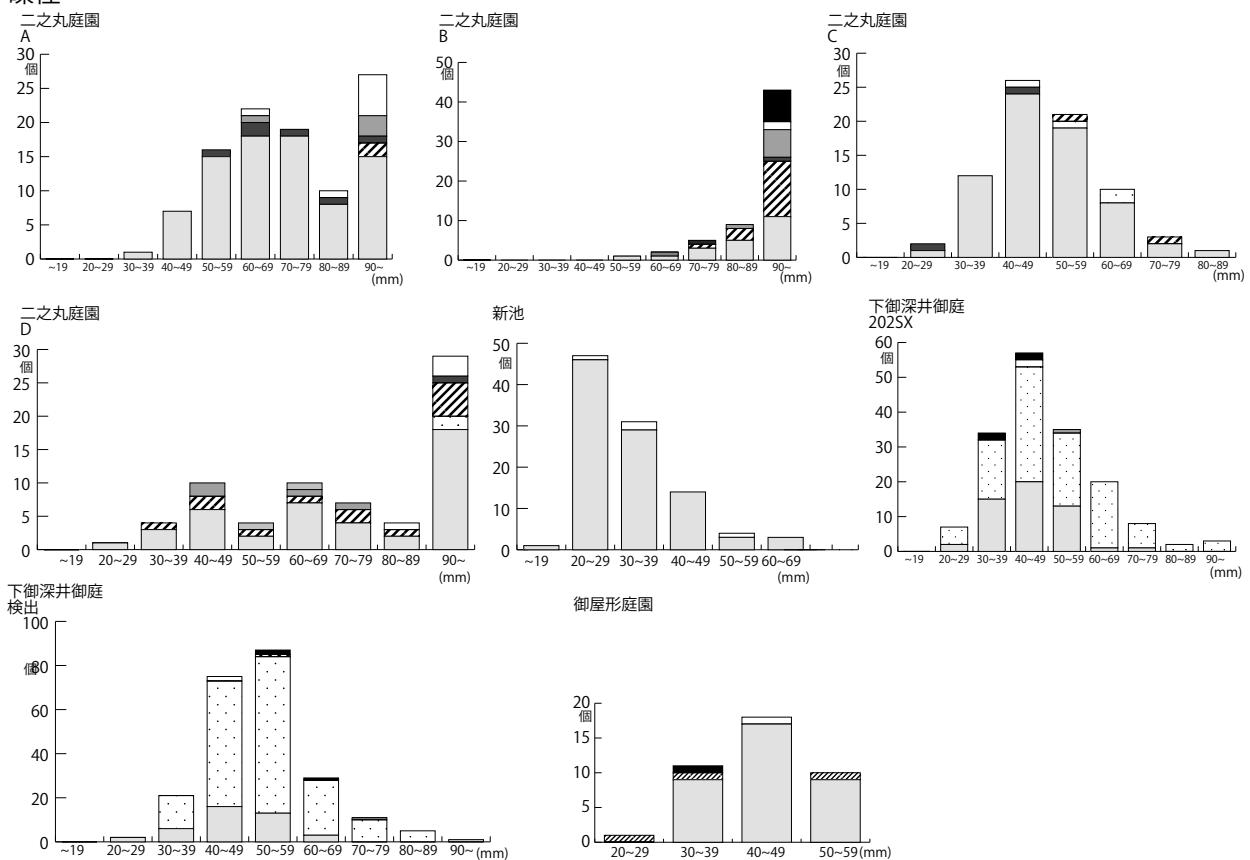


図 7 磯径 積み上げ棒グラフ